Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, *No.11*, pp. 155-164, 2017
信州大学教育学部研究論集　第11号　pp. 155-164　2017年

＜研究報告＞

「反党グループ」事件後のソ連（2）

―ウラルに追放されたカガノヴィチ（1957 年-1958 年）―

駒村　哲　　信州大学学術研究院教育学系

キーワード：「反党グループ」，カガノヴィチ，フルシチョフ，アルヒーフ

３　ロシアソビエト連邦社会主義共和国担当ソ連共産党中央委員会党組織部宛ミシンソ連共産党スヴェルドロフスク州委員会書記書簡

ソ連共産党中央委員会ロシアソビエト連邦社会主義共和国担当党組織部

1957 年 9 月 17 日

『地方，州，地区また市その他の居住地，企業，コルホーズ，施設，機関に国家及び社会の活動家の名前を冠する問題の規正について』(4) と題するソ連最高会議幹部会令が出されて，スヴェルドロフスク州の党市委員会及び党地区委員会は上記命令を説明する活動を組織する。

企業，施設，コルホーズ，の管理事務所では命令の朗読会が行われた。勤労者はソ連最高会議幹部会令を個人崇拝の後遺症を一掃する方向で正しくかつ時宜にかなったものとして全員一致で承認した。

ソ連共産党中央委員会６月総会後，命令までずっと個々の地区及びコルホーズの勤労者は以前授与された名前を改称する件で上級ソビエト機関に陳情に行った。例えば，スヴェルドロフスク市ソビエト執行委員会は，オクチャブリ地区マレンコフ名称コルホーズのコルホーズ員の請願で７月 25 日，このコルホーズをカリーニン名称コルホーズに改称した。

オルジョニキッゼ地区モロトフ名称通りの勤労者集会はその通りをウラルマシ通りに改称し，カガノヴィチ地区カガノヴィチ名称通りをマネヴローヴァヤ通りに改称するように求めた。

党活動家集会や党員及び労働者の集会でソ連共産党中央委員会６月総会総括討議の際，モロトフ地区をヴィゾフスキー地区に，カガノヴィチ地区を鉄道地区に改称する件で多くの提案が表明された。これに関連して市ソビエト執行委員会は８月にもロシアソビエト連邦社会主義共和国最高会議幹部会にこの問題の請願をおこした。

モロトフ名称ボグダノヴィチスキー地区コルホーズ員はそのコルホーズをティミリャゼフ名称コルホーズに改称することを求め，またカガノヴィチ名称コルホーズのコルホーズ

員はそのコルホーズをレーニン名称コルホーズに改称することなどを求めた。

コルホーズ通りの改称の件で勤労者集会の寄せられた請願はすべて，近いうちにスヴェルドロフスク市ソビエト執行委員会と州ソビエト執行委員会で検討されるだろう。

ソ連最高会議幹部会令を州の勤労者の間で説明する活動が続いている。

ソ連共産党［スヴェルドロフスク］州委員会書記ミシン

４　第 22 回アスベスト市党代表者会議速記録から

アスベスト市　　1958 年 10 月 19 日

カガノヴィチ発言の校正前の速記録から

（カガノヴィチ）［…］同志諸君，スヴィリドフその他の同志の報告の中で，私に充てててのいくつもの批判的コメントが述べられた。トラスト活動及び支配人としての私個人の活動で多くの欠陥があることを私はまた認めるし，そう思う。しかしなぜトラストが活動から切り離され，工業企業から切り離されるのか，私にはわからない。はたして企業のよい活動は同時にトラストのよい活動ではないのか，トラスト支配人として私個人気に入っている部分は少ない。自己の立派な活動について誇る企業指導者はそれを自分の功績としてのみ考え，欠陥はすべてトラストに関係があるとするのは正しくないと私は思う。

企業の業績は大きくかつ決定的であるが，トカリ同志がこれをしたように，それはトラストや私個人のみに欠陥を向ける権利を与えない。私がやってくるずっと前に，1960 年には広軌建設が予定されており，トラストだけが今年中央鉱山管理所の広軌建設を始める決定をした。トカリがこの建設に熱心でなかったことはみんなよく知っている，ズヴェジンスキー同志は度々この件で彼を批判した。

そもそもトカリの発言によれば，私がトラストにやってきたとき，トカリ同志は賢い人間だと私は言われたことを話したい。昨日の発言から彼がもっと利口だと私はわかった，彼がいかにあわてているか―まるで遅れないようにしているのが私にはわかる。(会場拍手)

本当のことを言うと，トラスト活動での欠陥を私は話さなければならない，トラスト…

（議長団から）カガノヴィチ同志，あなたの考えを説明できますか？

（カガノヴィチ）待ってください，私は終わります，私はあなたの邪魔をしなかった，だからあなたも私の邪魔をしないでください。

トラストは確かに雑事を負わされ，それで企業はトラストを助け，企業が自分で解決できるような問題で手一杯になった。私の間違いはアパラートの再編であまりにも大きな慎重さを見せたことである。

トラストが大きな問題及び一連の重要な問題の解決で遅れたことを認めなければならない。この責任は私個人にあるが，トゥトフ同志の発言はまことに見物である。トゥトフ同志は数年にわたって，そして今もトラストの有力者，おそらく有力者以上だ，しかしここ

で同志たちが分かり切ったことを論証しようというのは正しくない，私はアスベストでは少ししか知らないし，それに対して不満を持ってはいない，なぜならまだあまりに少ししか働いていないが，トラスト支配人として私はこの新しい仕事を覚えるために全力を尽くしたと言明した。

私は自分に欠点があり，個々の失敗をしたことを認める。私は自分の間違いを毎日認め，取り除こうと努力し，いつもうまくいったわけではないが，神経はボロボロ，体を壊したが，こうした私の間違いをひどく誇張するのは正しくないと私には思われる。私はかっとなり，怒りっぽい人間であるが，執念深くなく，寛容であり，密かに戒告処分にしたり，人を傷つけたり，解雇したりすることができないことを人々は知っている。私は一度も戒告処分を行わず，仕事から降ろすことをせず，懲戒を行わなかった。スヴィリドフ同志とズロトニク同志に，彼らには失敗がなかったと聞いてもかまわないか？スヴィリドフ同志の仕事のスタイルについてノヴィコフのコメントははたして考慮できるか，なにしろ彼は［この件で］昨年，スヴィリドフ同志の仕事のやり方は横柄，乱雑，不毛な事務処理，批判に不寛容，定見なし，皮相的な見方，大衆との生きたつながりをあらゆる種類の会議にすり替えると書いていたから，スヴィリドフ同志の仕事のやり方が 100％真実だと言えるのか？言えないと思うが，彼には実際失敗や失策があった。火のないところに煙は立たない。

私もその通り，火のない所に煙は立たぬ。失敗や間違いがあるが，働かない人や何もしない人だけが間違いや欠陥をしないのである。

（クロエドフ同志）許してください，カガノヴィチ同志，私は自分を許す代表者会議をお願いします。カガノヴィチ同志，あなたはやはり自分を正当化しようと努めている。あなたは党中央委員会から厳重な戒告を受けており，自分の振る舞いを改めたくない。何があったのか説明してください。

（席から）話をさせろ。

（ゴリャチョフ同志）カガノヴィチ同志，続けてください。

（カガノヴィチ同志）毎回１人の人間をこっぴどくむち打つのはいけない。まあいいさ，人生はすべて自分のために働くのか？私は密かに自分の気持ちを押し殺し，私とともにあったものすべての後耐え忍ぶのに私には時間が必要だ，私は耐え忍んだ。私は努力し，私は人々を受け入れ，私は人に会い，説明してやり，決して首にしない。しかしこれはクロエドフ同志が言ったこととは違う。

同志諸君，私の政治的間違いは党中央委員会総会で非難され，その決定は新聞で公表され，中央委員会書簡で述べられ，共産主義者全員がそのことを知っている。私はこの決定に賛成し，この件で各集会で話をし，私は何度も登壇した。中央委員会文書で語られている以上のことは言えない。

私は自分の再三にわたる発言で，辛辣に自分の間違いを認めたし，今も認めている，私の人生で最初で最後の自分の政治的間違いを責めた。私は党中央委員会決定とその後の党

決定・決議をすべて必ず実行するよう要求したし，要求している。

スヴィリドフ同志は私が国家と政治の問題であまりに多くの発言をしたと語った。多分多かっただろう，もしかしたら私の昔からの癖がでたのかもしれない。私はそれを考慮に入れるが，完全にはなくならない。

しかし本当のことを言うと，もし私が国家と政治の問題で多くの発言をするなら，本当のことを話す，私は党の政策に反対し，それを疑った？！私は党の政策，その決定遂行を自分の発言の中で要求しなかった？！あなた方はまったく形だけをとり，中味をすり替えている。

党のアスベスト市委員会での私の活動中，スヴィリドフ同志が報告したある問題に関しても一度もコメントしなかったといわなければならない，アスベストに私が滞在して 10 日間，私の発言の指導者的性格について１つのコメントを除いては。この後私は委員会総会に出て，この自分の間違いについて話した。

そればかりでなく，５月にスヴィリドフ同志は私がアスベストでどういう気持ちをもったか愛想良く尋ねた。５月に，５ヶ月前だ。私は答えた，精神的には良好だが，肉体的には良くない，私は戦線で負傷後痛めたぎっくり腰で苦しい，そのため病気と 65 歳の年齢を考慮に入れて，私は彼に年金入りの問題を提起し，提起した。そしてこの願いを支持するよう頼んだ。スヴィリドフ同志はまたしても愛想よく同志風に言った。『あなたは政治家，何を急ぐのか？まだ１年も経っていない。２ヶ月過ぎた，あなたは懲戒解除の問題を提起し，それから評価する』そして今は懲戒解除とともにこうした不測の事態。

私は罪をうやむやにし，批判をうやむやにするためにこれをすべて話すのではない。私は過去をすべて正しいと受け入れる。党が私たちに教えるところでは，批判と自己批判は推進力であり，歴史家に活力を与えて前に進ませる力である。党の教えでは批判のあるところに真実の一部があり，それが正しいことを受け入れて教訓を引き出すことが必要。

私は党機関に約束する，私は全人生と全活動でスヴィリドフ同志その他代表者会議代表による批判のコメントを学ぶ。（拍手）

宣伝・扇動担当ソ連共産党スヴェルドロフスク州委員会書記クロエドフの発言から

（クロエドフ同志）[…] 同志諸君，ここでカガノヴィチ同志が発言した，彼の発言は政治的に不十分であると私はあなた方に心から率直に申し上げたい。私は今何が起こったか話そう。

カガノヴィチ同志は特別の地位を占め，あなた方も知っているように，このかつての主要な活動家は党及びソビエト国民に対して重罪を犯した人である。反党グループが何を要求し，彼らが何を要求したか，あなた方はよく知っている，私はそれについて話さないだろう，なぜならあなた方はよく知っているから。それゆえ同志諸君，全党員がカガノヴィチ同志の発言に対して非常に用心深く文句を言わなければならないのは当然であり，カガ

ノヴィチ同志がいかに振舞うか，彼が心を入れ替えるために全力を尽くすか，警戒しなければならない。それから彼は改心するためにソ連共産党中央委員会によりアスベストの機関に送られ，我々，同志諸君と党州委員会及び党市委員会，そしてあなた方全員はカガノヴィチ同志が改心することに，彼が自分の間違いを自覚し，こうした間違いを正すことにははたして反対なのか？

しかし，カガノヴィチ同志が自分の間違いを正したり，正すことを望んでいるという印象は何となく受けない。

率直に言えば，我々が第 20 回党大会後の期間に有する巨大な成功に照らして，カガノヴィチ同志は大変な間違いをし，反党的立場に立ったと，また自分の間違いを反省するがそれを行わず，一般的な言葉に限ったと私は考えた。

いったいはたして誰がカガノヴィチ同志の説明に満足できるだろうか，彼はですね，自分の発言で党の決定に反対を呼びかけなかったし，呼びかけていない，党に反対しないなどと言うんですよ。

しかしカガノヴィチ同志，これでは発言が少ない。この代表者会議であなたの重大な間違いが暴露されて，あなたの発言が必要だった，あなたが実際いかに間違いを正すのか，代表に話さなければならないと私は思う。他方あなたは第 20 回大会後分派活動をやったのではないか。あなたの発言にはソ連共産党第 21 回大会の準備問題，何を代表者会議に話すのかという問題箇所が見当たらなかった。

そして最後。

（叫び声）いい加減にしろ。

（クロエドフ）もしここでカガノヴィチ同志の誤った欠陥のある指導スタイル，無礼な行為，厚顔無恥を激しく批判し，またそのことを理由に党中央委員会により彼がすでに罰せられたとしたら，つまりカガノヴィチ同志はこうした自分の欠陥を正していないと私は考える。代表者会議の批判にカガノヴィチ同志，あなたは耳を傾けなければならない。だってカガノヴィチ同志，ここであなたが，『私は誰も侮辱しなかったし，誰も懲戒処分にしなかったし，誰も解雇しなかった』と言ったのと同じようにここで振舞うことはできないので。はたしてこれは指導者の原則的方針か？もしあなたが欠陥，醜悪な行いの張本人を見つけたら，彼を罰しなければならない，無原則を見せてはいけない。

（叫び声）もうたくさんだ。

（クロエドフ）そんなわけで私はカガノヴィチ同志の代表者会議での発言を政治上不十分なものとみなす。

ソ連共産党アスベスト市委員会第 1 書記スヴィリドフの結びの言葉から

（スヴィリドフ）私はカガノヴィチ同志の発言の件で話さなければならない。カガノヴィチに関して報告で語られたことすべてが誇張されたものではないと私は考える。この報告

が党市委員会総会で承認されたとき，我々は特にこの問題について言及し，党市委員会の昔からのメンバーは全員，報告で述べられたことはすべて完全に正しいと言った。

カガノヴィチ同志は今まで彼に提起された問題に対して回答を避けている。我々は彼とこのテーマで話し合った。彼は無礼な態度に関して党市委員会に説明書を出した。全市集会での彼の発言には口先だけのものが多いと一度ならず我々は助言した。自分の間違いを彼は共産主義者の前では決して認めるつもりはなく，今日再び彼は自分に助言しないよう党市委員会に対して攻勢に転じた。党市委員会はほとんど彼の間違いに罪があるということになる。

彼は党に対して大きな責任があり，国民に対しても大きな責任がある，そして彼の振る舞いは厳しい非難に値する。もし彼がそのことをわからないなら，彼にとってはより悪い。今日彼宛の批判は完全に正しい，改心への教訓となり，彼はまだ多くのことを学ぶ必要がある。彼が今自分の発言で強調したのは，私がトゥトフ同志に劣らずものを知らないだって。この発言はどういうことか？何十年にもわたってここで働き，もしかしたら何十年の［うち］この時に彼がやったことを何百回も行った。指導者的労働者に疑いをかけるこの部分に私は賛成しない。彼が行っていることそれは職業柄で決められる。もし彼がこれをやらなかったら，長い間彼の不一致の県は提起されなかっただろう。工業プランが遂行されなかったことではまだ足りない。我々の１つの印刷所だけではプランを遂行できない，そのため企業の指導者は全員鼻を高くする？これは指導者の責務だ。

さらに 100-150 人がグループで休憩室へ行き写真を撮り始める，何のために謙虚なのにも関わらず自己の偉大さを強調するのか？（会場のざわめき）

自分の発言を終えて，私は自分の観点から批判は非常に鋭く原則上のものであり，党市委員会の新メンバーは自分の仕事を改善することができると私は言わなければならない。

５　キリレンコソ連共産党中央委員会スヴェルドロフスク州委員会第１書記宛クロエドフソ連共産党スヴェルドロフスク州委員会宣伝・扇動担当書記書簡

ソ連共産党スヴェルドロフスク州書記
キリレンコ同志

296 号　　1958 年 10 月 21 日（秘密）

去る 10 月 18-19 日にアスベスト市党代表者会議でのソ連共産党市委員会の活動報告及び多くの代表の演説で―コシュキン同志（北方鉱山管理所党機関書記），トカリ同志（中央鉱山管理所長），ブルミストロフ同志（中央鉱山管理所キャプテン），モロズキン同志（市ソビエト執行委員会議長），ズロドニク同志（南方鉱山管理所長），トゥトフ同志（『連邦アスベスト』トラスト主任技師）その他―『連邦アスベスト』トラスト支配人カガノヴィチ同

志はアスベスト企業の欠陥ある指導法及び彼の間違った振る舞いを理由に激しい非難に曝された。

市委員会の活動報告では，トラストの仕事でカガノヴィチ同志が大臣らしいスタイルを植え付け，活き活きとした組織活動を会議の空騒ぎに取り替え，非原則的問題，書類集め，ビザなどでさえ各種委員会をつくったと言われた。

カガノヴィチ同志は今まで持ち前の悪い癖，無礼な行為，侮辱的言辞は捨てず，自分の部下の意見に耳を傾けることを望まず，カードルにいぶかしそうな態度をとり，事の本質を究明するのがきわめて下手で，そのために部下たちに容易ならぬ不平と非難を招いた。

報告で指摘されたのは，カガノヴィチ同志が自分に対して特別待遇を主張することである。彼は政治・国家の問題で通常の会議既定のどこにも認められない指導者演説をした。

『多くの共産主義者たちがカガノヴィチ同志は自分の反党的活動について集会で正直に公然と話し，それをこき下ろし，正しくかつ誠実なやり方で党の権力機関に援助を求めることを前提とした』とさらに報告で言われた。

しかしながらカガノヴィチ同志の行動は対立について語り，党に対する偽善で彼を責める完全な根拠を与えるものである，以前の立場からの自分の政治的変節についてのある公開演説で，彼は語らなかったので。これはすべてカガノヴィチ同志がソ連共産党中央委員会総会決定から正しい結論を導き出せなかったということの根拠をあたえるものである。

カガノヴィチ同志のこのような性格描写はソ連共産党市委員会総会の代表者会議の直前に全員一致で確認され，一連の登場した代表により強調された。

カガノヴィチ同志は 15 分間続いた代表者会議での自分の発言で(彼はまた特別の条件を付けて,全員に決められた発言時間を守ると述べた)こうした非難をはねつけようとした，自分の発言のほぼ３分の２は自分の振る舞いの弁明に費やされた。まず第１に，カガノヴィチ同志はアスベスト工業発展での自分の功績について語った。とりわけ彼は鉱山の根本的メカニズムは実際のところ，この 1.5-２年間にやっと始まったという（まさにそれにより，彼がアスベストに到着してからやっと，本格的にこの仕事が始まった)。カガノヴィチは自分の欠陥のある指導スタイルを否定した。彼は自分に欠点があり，個々の失敗があることは認めた。『なにしろ私は誰も戒告処分にせず，仕事を辞めさせず，処罰しない』などとカガノヴィチ同志は述べた。(速記録から引用)

実際のところ，政治上の非難をカガノヴィチ同志は次のように述べた（速記録から引用する)。

『私の政治的間違いは党中央委員会総会で非難され，その決定は新聞で公表され，中央委員会書簡で述べられ，共産主義者全員がそのことを知っている。私はこの決定に賛成し，この件で各集会で話をし，私は何度も登壇した。中央委員会文書で語られている以上のことは言えない。スヴィリドフ同志は私が国家と政治の問題であまりに多くの発言をしたと言う。多分多かっただろう，もしかしたら私の昔からの癖がでたのかもしれない。私はそれを考慮に入れるが，完全にはなくならない』さらに『党のアスベスト市委員会での私の

活動中，スヴィリドフ同志が報告したある問題に関しても一度もコメントしなかったといわなければならない，アスベストに私が滞在して 10 日間，私の発言の指導者的性格について１つのコメントを除いては。この後私は委員会総会に出て，この自分の間違いについて話した』

自分の発言でカガノヴィチ同志は代表者会議側から自分に対する同情を呼び起こそうとした。彼が言うには，戦線で負傷後痛めたぎっくり腰に悩み，65 歳になり，それを考慮に入れて年金入りの問題を提起したが，この問題は解決していない。代表者会議の代表が行った批判的コメントを自分の人生と仕事で考慮すると最後に彼は代表の拍手を浴びて語った。

自分の全発言でカガノヴィチ同志は第 20 回党大会及びソ連共産党第 21 回大会の準備について話すための場所を見出せなかった。

カガノヴィチ同志の話し中，ソ連共産党市委員会書記のスヴィリドフ同志と私は野次でカガノヴィチ同志を止めさせようとし，カガノヴィチ同志が犯した重大な間違いに代表者会議の注意を引きつけようとした。とりわけカガノヴィチ同志が自分の振る舞いを擁護したとき，私は立ち上がり，カガノヴィチ同志の発言を遮ることに対して許しを請うた，そしてソ連共産党中央委員会の重大な戒告処分を有する彼がなぜ自分の振る舞いを改めたくないのかということに対して代表たちに説明するように彼に求めた。しかしこうした私の野次は個々の代表の側から否定的反応にあい,『発言を邪魔するな』,『終わりまで話をさせろ』という単発の叫び声が上がった。

カガノヴィチ同志の発言の後，代表のパシュキン同志（バジェノフスキー建設主任），アンドリュシェンコ同志（KGB 支部長）がカガノヴィチ同志の発言に厳しい評価を与えた。

代表者会議の終わりの発言で，私はカガノヴィチ同志の話を政治的に不十分なものとして特徴づけ，党及びソビエト国民に対して重罪を犯したカガノヴィチはこうした間違い，自分の個人的振る舞い，指導スタイルを改める意欲を示さず，とりわけそのことについてはこの代表者会議で行われた彼のスピーチが証明している。代表者会議代表は大きな関心をもって私のスピーチを終わりまで聴いたが，私がカガノヴィチ同志について語ったところで２回『もう止めろ』という別々の叫び声が聞こえてきた。

市委員会メンバーの投票の際，17 人の代表がカガノヴィチの名前を公報に書き入れたという事実に人の注意を向けさせる。これに関して指摘しなければならないのは，これが個々のシグナルにより知られるようになったとき，カガノヴィチ同志は代表者会議直前個々の代表を説き伏せたり，自分に好意を持つように仕向けたりしようとした。例えば，トカリ同志―中央鉱山管理所所長は代表者会議直前，カガノヴィチが彼と話をし，カガノヴィチ宛て市委員会の活動報告に何が書き込まれているのか知ろうと試み，彼の心をつかもうと努力したが，トカリ同志の言明では，激しい反撃を受けたと私とスヴィリドフ同志に知らせた。

ソ連共産党市委員会メンバーと州代表者会議メンバーにカガノヴィチは登用されなかっ

た。彼は代表者会議幹部会メンバーにも選出されなかった。

クロエドフ

６　おわりに

最後に,本稿で訳出紹介したアルヒーフ史料を基に,「反党グループ」事件後のフルシチョフのソ連について３点ほどコメントしたい。

まず第１に,「反党グループ」事件後，党内での指導権を確立・強化したと思われるフルシチョフに対して，一部ではあるが地方の党組織から公然と批判がなされていたことがわかる。少なくともスヴェルドロフスク州内には,追放されたカガノヴィチに同情ないし支持を与える共産党員がいたのである。

第２に，スターリン時代とは異なり，フルシチョフ期は権力闘争で敗北した指導者（政敵）を肉体的に抹殺することはなかったが，カガノヴィチのように自分に対して「特別待遇」を要求することについて追放先の共産党指導者たちの中には大きな不満を表明する者がいたのである。

第３に，クレムリンでの権力闘争に敗北した結果，そうした指導者たちの名前を冠した通り，企業，コルホーズ，ソフホーズ，研究機関，教育施設などでその名称を変更するキャンペーンが各地方で始まったことに注目せざるを得ないだろう。

注

（４）このソ連最高会議幹部会令は 1957 年９月 11 日に採択された。

参考文献

[1]《Товарищ Каганович претендует на особое к себе отношение》.Уральская ссылкаопального соратника И. В. Сталина. 1957-1958гг.（Г. Е.Корнилов . А.В . Сушков）Исторический архив,2005,№.4, с,4-26.

[2] Молотов ,Маденков, Каганович.1957. Стенограмма июньского пленума ЦК КПСС и другие документы.М., 1998.

[3] Президиум ЦК КПСС.1954-1964. Черновые протокольные записи заседаний. Стенограммы. Постановления. Т.1. Черновые протокольные записи заседаний. Стенограммы. Гл. Ред. А.А.Фурсенко. М.,2003.

[4] Каганович Л.М. Памятные записки. М.,1996.

［5］拙稿「『反党グループ』事件に関する一考察（1）―1957 年６月ソ連共産党中央委員会速記録を手がかりに―」『信州大学教育学部紀要』(第 86 号, 1995 年 12 月, 125-134 頁)
［6］拙稿「中央委員会総会（1957 年６月）について」『信州大学教育学部紀要』(第 89 号, 1996 年８月，107-118 頁)
［7］拙稿「『反党グループ』事件とその後」『信州大学教育学部紀要』(第 89 号 1996 年 12 月，87-98 頁)

付記

本稿は『「反党グループ」事件後のソ連(1)―ウラルに追放されたカガノヴィチ(1957-1958 年）―』(「信州大学教育学部紀要」第 117 号，2006 年３月）に続くものである。

(2017年 7月19日　受付)
(2017年 9月19日　受理)